

認知症高齢者ケアにおける ストレンクス視点に基づく事例検討会の有効性(第2報)

～職員意識と実践の変化をもとに～

筒井 沙耶¹⁾ 山田 由美子¹⁾ 白澤 政和²⁾ 鄭 尚海³⁾

¹⁾株式会社シティーエステート ²⁾桜美林大学大学院/老年学研究科 ³⁾大阪市立大学大学院/生活科学研究科

調査方法

調査協力者

介護付有料老人ホームに勤務する介護職員15名。

項目	カテゴリー	人数 (%)
性別	女性	12(80%)
	男性	3(20%)
所持資格 (複数回答)	介護福祉士	6
	訪問介護員(1-3級)	12
	看護師	2
	社会福祉士	1
	介護支援専門員	1
職種	訪問介護職	11
	看護職	2
	社会福祉職	1
	介護支援専門員	1
介護の経験年数 (平均:年)	5年以下	9
	6-10年	2
	11-15年	4



※当初18名であったが、途中で転勤となった1名と、事例検討会の参加回数が3回以下の2名を除いた15名を対象に分析した。

調査内容

ストレンクス視点に関する研修プログラム(月に2回)を開催し、受けた職員に期間中3回、認知症高齢者に対する理解や実践についてのアンケートを取った。開催前後の変化をアンケートの比較から調査した。

アンケート項目

- 1) 認知症高齢者に対する肯定的なとらえ方(7項目)
- 2) 高齢者のストレンクスの把握状況(12項目)
- 3) 高齢者のストレンクスの活用状況(24項目)

分析方法: 対応のあるt検定と単純集計

調査期間

2012年7月～2013年1月末

倫理的配慮

調査に先立ち、調査協力者(研修プログラム参加職員)に対して、書面で調査結果の公表について承諾を得た。また、今回の検討会から発表に至ることについては、当施設の長から承認を得た。

★このことから、ストレンクス視点に基づいた事例検討会は職員の「認知症高齢者に対する肯定的認識」「認知症高齢者の肯定的心理」「人的支援や環境」についての把握、「身体機能」の活用に対する効果が大きいことが示唆された。ただし高齢者の「身体的能力」の把握と、全体として高齢者のストレンクスの活用には有意差がみられず、今後の課題として残った。

全体の考察

- ・事例に上った高齢者1人1人のストレンクスを全職員で考え、発表し、把握できたことにより、認知症高齢者に対するとらえ方が肯定的に変わった。
- ・また、定期的な事例検討会により、高齢者のストレンクスは確実に把握できるようになった。
- ・その結果、通常変化の激しい認知症高齢者の認知機能、また日常生活状態を、7か月間にわたり維持、または向上することができた。
- ・結果、認知症高齢者の機能向上には、出来ないことに目を向けるより、ストレンクスを見つけどうケアに活かしていくかを、職員全員で考えていくことが重要である。
- ・しかし、身体機能(ADL)や、人的支援(施設の場合、家族や他の入居者、職員)・環境(施設内のお気に入りの場所)はケアに反映しやすく、肯定的な心理は把握できても、ケアに反映しにくいことが明らかとなった。今後は、認知症高齢者の意欲や趣味の活用法を話し合っていきたい。

結果

1) 認知症高齢者のとらえ方

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目調査の平均得点	t検定結果
①身の回りのことについて出来る部分があると思う	4.27	4.60	5%水準↑
②希望をもっていると思う	3.87	4.33	5%水準↑
③楽しみがあると思う	4.27	4.40	n.s
④好みがあると思う	4.67	4.67	n.s
⑤何かをする意欲があると思う	3.87	4.33	傾向あり
⑥人とのつながりを望むと思う	3.73	4.00	n.s
⑦何らかの役割を持ちたいと思う	3.80	4.20	傾向あり
平均点	4.07	4.36	

2) 高齢者のストレンクスの把握状況

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目の平均得点	t検定結果	
身体機能	①食事について高齢者ができることの把握	3.33	3.47	n.s
	②入浴について高齢者ができることの把握	3.67	3.53	n.s
	③排泄について高齢者ができることの把握	3.40	3.60	n.s
平均点	3.47	3.53	↑	
肯定的心理	④趣味の把握	2.93	3.33	n.s
	⑤楽しみの把握	3.13	3.33	n.s
	⑥関心の把握	3.07	3.53	5%水準↑
	平均点	3.01	3.40	↑
人的支援や環境	⑨家族からの支援の把握	2.67	3.13	n.s
	⑩仲良い高齢者の把握	3.27	3.60	5%水準↑
	⑪気に入りの職員の把握	2.87	3.20	n.s
	⑫気に入りの場所の把握	2.40	3.07	1%水準↑
平均点	2.80	3.35	↑	

3) 高齢者のストレンクスの活用状況

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目の平均得点	t検定結果	
身体機能	⑬食事について高齢者ができることの活用	2.93	3.40	5%水準↑
	⑭入浴について高齢者ができることの活用	3.13	3.27	n.s
	⑮排泄について高齢者ができることの活用	3.27	3.53	n.s
平均点	3.11	3.40	↑	
肯定的心理	⑯趣味の活用	2.71	2.93	n.s
	⑰楽しみの活用	3.06	3.00	n.s
	⑱関心の活用	2.82	2.93	n.s
	⑲希望の活用	2.82	2.93	n.s
	⑳意欲の活用	2.94	2.93	5%水準↓
平均点	2.85	2.95	↑	
人的支援や環境	21家族からの支援の活用	2.71	3.00	n.s
	22仲良い高齢者の活用	3.00	3.13	n.s
	23気に入りの職員の活用	2.67	2.87	n.s
	24気に入りの場所の活用	2.53	3.00	1%水準↑
平均点	2.73	3.00	↑	

・t検定の結果: 事例検討会開催前に比べ、認知症高齢者に対する肯定的なとらえ方が5%、高齢者の**肯定的心理の把握**と**人的支援や環境的ストレンクスの把握**が1%水準で高かった。